

幽 暗 の 新 世 界

—メルヴィルのアメリカ像—

はじめに

南北戦争を主題とするメルヴィルの詩集『戦争詩集、および戦いの諸相』（二八六六、以下『戦争詩集』と略記）の中に、「アメリカ」と題された一篇がある。四連から成るこの詩の第一連で歌われるのは、へんぼんとひるがえる旗の下、遊びに打ち興じる子供たちと、優しくそれを見守る若い母親の姿である。

ドームの翼明るく伸びゆくところ、

楽しげにたなびく旗を見たり。

星座ベレニスのごとく輝きて、

雄々しく空中に漂いたり。

悠然とはためくその様は、

はるかブラジルの巨大な波頭

赤道をうねるがごとし。

眼下の大地、平和に憩い、

星 野 勝 利

（岩手大学教育学部）

戯れる幼子たち、
うら若き母親の胸に、
にこやかに抱かれいたり。 (二六〇)¹

いかにも平和な一コマであるが、ここにはしかし、国家としてのアメリカを射程に納めるメルヴィルの趣向が浮かび出る。「ドーム」から連想されるのは、旗をたなびかせたキャピトル（国会議事堂）であり、「若い母親」（原文大文字）の姿は、当時ユニオン（北軍）の側の旗印として用いられた若い女神の姿を映し出す。

第二連以降、このような結構で描かれるのは、南北戦争時における国家アメリカの歩みである。牧歌的平和な世界は、ある日突然戦乱の嵐に襲われ、わが子が相戦う様を目にした母親は、絶望のうちに失神する。しかし、やがて再び目覚め、静かに立ち上がり、その眼を彼方へと向ける。すなわちメルヴィルは、女神という神話的形象を通して、南北戦争という歴史的事象を潜り抜ける国家アメリカの歩みを、いわば通時的に歌うのである。

このような視点で眺めた場合、注目したいのは、最終第四連における母親の姿である。死同然の世界から新たな世界へと甦る若き母親、すなわち戦乱の荒廃から身を起す国家としての女神アメリカに、われわれはどのような意味を読み取ることができるであろうか。われわれはここに、歴史的位層におけるアメリカ、その来し方行く末に対するメルヴィルの視座を、垣間見ることはできないであろうか。

しかし突然、彼女は忘我から覚めたり——
忘我、すなわち昇華した生にいたる死——
足元には砕けたる旗竿、

天を向いたその顔、

情熱の跡も、闘いの跡もなく、

静かなる表情。苦しみを告げはしたが、

汚れを経て浄化するもの——

再び来ることなき鋭い痛み——

然るべき知識により抑制された勝利、

妙なる力、賢き希望、

年相応に成熟したる若さ——

額には法、目には帝国。

かくて彼女、厳かに旗を掲げ、

時に影、光に追われ、

遠き彼方の峰へと逃れ、

彼女独り岩上に立てり。(二六一)

アメリカへの視座に関しては、すでに多くのことが言われている。たとえはヨーロッパから眺めた場合、アメリカとはすなわち西の世界にはかならない。しかし、この方角に寄せるヨーロッパ人の意識には、独得のものがある。『神曲』の中でダンテが、ジブラルタル海峡の彼方へとオデッセウスを送り出す時、その意識の深層には、

ユートピアやエリジウムとしての西の世界への憧憬の念が、おそらくは底流していたであろうし、『テンベスト』の中でシェイクスピアが、「なんてすばらしい！立派な人がこんなに大勢！人間がこらうも美しいとは！ああ、すばらしい新世界！」（五幕一場）とミランダに語らせた時、そこにはテラ・インコグニタ（未知の大陸）としての西の世界への、熱い思いが込められていたであろう。この劇の舞台はなるほど地中海上のさる島であったが、当時シェイクスピアは「西半球で自国のものたちが何をしているか知っていた」⁽³⁾のであり、とすれば、ミランダの言う「すばらしい新世界」とは、大西洋の彼方に出現しつつあった新たな世界を多分に意識したものに相違ないのである。

詩人ジョン・ダンの言葉も、この点では同様である。詩「エレジー」で、ほかならない自分の恋人の肉体を歌う青年詩人ダンは、これを「アメリカ」、「新世界」として捉え、しかもそれを、「王国」「寶石鉱」「帝国」そして「自由」といったイメージで連結する。

ああ、僕のアメリカ！新たな僕の新世界、

住むのは一人ゆえ、このうえなく安全な僕の王国、

僕の寶石鉱、僕の帝国、

君を発見して何と僕は幸せなことか！

絆を結ぶことは、すなわち自由になること——

それゆえ手が触れるところ、すなわち僕の封印なのだ。

〔エレジー〕十九番

後の大僧正ダンとしては、いささか快樂主義に過ぎる嫌いが無いわけではない。しかし、比喩の妙ゆえに形而上詩人と呼ばれる後のダンの姿は、すでに躍如としたものがある。と同時に、ダンのこの修辭はきわめて示唆に富む。恋人と等価なものとして機能する新世界アメリカは、ダンテやシェイクスピアに限らず、広くヨーロッパ

的意識の深層において作動する恋人的存在としての西の世界を示唆するであろうし、また、「帝国」や「自由」で括り取られるこの世界は、来たるべき国家としてのアメリカの姿を、見事に暗示するかのようである。そして、ここに見られるエクスタティックなまでの対象への感溺ぶりは、後にアメリカ内部に底流することになる一つの典型的なアメリカ観をも連想させずにはいない。

とはいえ、一口に典型的なアメリカ観と言っても、その内質は多様だろう。時代により、場所により、当然そこにはさまざまな変奏がありうるだろう。しかし、国家としてのアメリカの創造が、ピュリタンによる植民地建設にその多くを負うとするならば、ティモシ・ドワイトの詩「アメリカ」(一七七二)の次の一節は、いわば正統的それを代弁するものとは言えまいか。ピュリタンにとって新世界アメリカとは、神との契約に基づく「約束の地」であったが、敬虔なピュリタンとしてイエール大学の学長も務めたドワイトは、国家アメリカの聖なるべきこのような役割を再確認する。

光と歡喜の国、万歳！ 汝の力は

周囲の海をも満たすであろう。

広大な大地を貫き、栄光は伸びゆき、

野蛮な国々は、汝のもとに伏すであろう。⁽⁴⁾

このようなドワイトの言葉に、ダンの美的アメリカ観との関連を探ることは容易である。アメリカに「帝国」を見るダンと、力あふれる「栄光」を見るドワイトは、容易に手を結ぶはずである。しかしドワイトのアメリカへの視座は、ダンのそれを、更に一步押し進めたものと言っている。ドワイトの視座は、新世界アメリカをメシアの再臨すべき場とみなす、いわゆるミレニアリズム(至福千年主義)のそれと言っているであろうが、実際この詩の末尾では、「その時天の王国は降り／光と栄光とがこの世をおおうであろう」と歌って

いるのである。

このようなアポカリプティックな視座は、ニュー・イングリランド・ピュリタン特有のものかもしれない。しかしこれは、むしろピュリタンにのみ特徴的なものであるわけではない。たとえばドワイトの同時代人、フランス人クレブクルは、根っからのアメリカ人であったわけではない。しかしその彼が『アメリカ人農夫の手紙』(一七八二)で描くアメリカ像は、多分にピュリタンの色彩を留めるものである。クレブクルの見るところ、君主も、宮廷も、貴族もなく、聖職者による支配もない新世界アメリカは、「世界に存在する最も完璧な社会」(六七)⁽⁵⁾であり、またそこに生を営むアメリカ人は、およそ次のような存在である。

「彼こそアメリカ人であり、古い偏見や慣習をすべて脱ぎ捨て、新たなそれを、自ら選んだ生活様式から、自ら従う新たな政府から、そして新たなその地位から享受すべき人なのである。偉大なる「母校」の広大な膝に抱かれ、彼こそアメリカ人となるのだ。あらゆる国の人々が、ここでは新たな民族として一つに溶け合い、その苦勞と子孫とは、いつの日か世界に大いなる変革をもたらすであろう。アメリカ人とは、はるかな昔「東方」で生れた芸術や学問、活力や勤勉さを、すべて携えた西からの巡礼者なのであり、彼らこそ円環を結ぶものなのだ。(七〇)

これを見る限り、クレブクルのアメリカへの思い入れは相当深い。しかし、一方クレブクルは、新世界のあり様を全面的に許容しているわけでもない。「最も完璧な社会」であるはずのこの世界が、たとえば奴隷制という「惨めな光景」(一六八)を抱えていること、そして政治の状況や辺境の地の現実がユートピアからは程遠いものであることを、クレブクルは十分に見据えているのである。この意味ではクレブクルの視座は、詩「アメリカ」におけるドワ

イトのそれと、多少とも異なるものである。しかしながら、たとえばロレンスに言わせれば、アメリカ人の典型は、現実的な意味ではフランクリンであるが、「情緒的なそれはクレブクル」である。とすると、そこに多少の差異はあるにしても、ドワイトやダンのそれ、あるいはシェイクスピアのそれとも無関係とは思われないクレブクルの視座の中に、アメリカ観の一つの典型を見るときも、さほどの外れのこととはなるまい。

しかし、このような脈絡で眺めた場合、メルヴィルの詩「アメリカ」は、はたしてどう理解されるべきなのであろうか。「汚れを経た浄化する」という女神の体験、「額には法、目には帝国」を浮かべて一人岩上に立つその姿、そして「闇」と「光」とが微妙に交錯し合うその地平とは、はたしてどのような意味を内在させたものなのであろうか。そもそもメルヴィルの結ぶアメリカ像とは、どのような輪郭を描くものなのか。

一

メルヴィルの結ぶアメリカ像を一先ず俯瞰しようとするならば、まず注目せねばならないのは、『レッドバーン』（一八四九）と『ホワイト・ジャケット』（一八四九）の中の一節だろう。大作『マーディ』（一八四九）と『モウビー・ディック』（一八五二）の狭間で書かれたこれらの作品は、いずれも片手間仕事と言ってよい性格のものであった。しかしここでは、メルヴィルのアメリカ像を探る上で格好の手掛かりとなるべきアメリカ像が、きわめて鮮明な輪郭を持って提示される。

たとえば『レッドバーン』の場合、リヴァプールを訪れた青年ウィリンバラは、そこで新世界アメリカに向かうドイツ人移民の姿を目にする。彼らが朝夕繰り広げる整然とした歌と祈りの儀式は、ウィリンバラの心をいたく刺激するが、そこでウィリンバラが思い描

くのは、自ら後にしてきた母国アメリカの、次のような姿である。

コロンブスの時代よりもさらに昔から、敬虔なものが求めてきたあの彼岸の世界は、新世界にこそ見いだされたのだ。そしてそこに深々と降ろされた錨が、「地上の樂園」をもたらしたのだ。その「樂園」は、昔や今のそれというわけではなく、神のみこころのまま、時が十分に熟した時、そうなるべきものなのだ。種子はすでにまかれており、収穫の時は必ずや訪れる。すべてが輝くその朝、われらの子供の子供はすべて、釜を手に、刈り取りへと出かけるであろう。その時、ベルの呪いは消え、新たなベンテコストが来たり、彼らの話す言葉は、イギリスの言葉となるであろう。（Ⅳ、一六九）

一方、続く作品『ホワイト・ジャケット』は、アメリカ海軍の一艦艇の日常をつぶさに語るものであるが、その際艦上に残存する鞭刑をイギリス海軍伝来の前近代的陋習と見る語り手は、過去の軛を断ち切り、未来を開くことこそアメリカ人のなすべきことではないかという立場から、いささか昂揚した気配のうちに、こう言葉を継ぐ。

古代イスラエルの人々は、幽囚の家を逃れ出て、エジプト人に倣うことはなかった。その彼らに、神はすぐ救いの手を差し伸べ、新たなものごとを与えてくださった。ところでわれわれアメリカ人は、特別に選ばれた民——すなわち現代のイスラエル人なのであり、われわれが、自由というこの世の箱舟を導くのだ。七十年前、われわれはくびきから逃れ出た。そして、地上の大陸一個を支配するという生得の権利のほかに、神はわれわれに、将来も我々のものとして、政治的異端のものを幅広く受け入れる権利を与えてくださった。今後とも彼らは、血に汚れた手をかざすことなく、われらが箱舟のかげに身をよせるであろう。思うに、わが民族に、神は偉大なることを予定されたのであり、われわれはそれを魂の中に感じているのだ。他国のものは、

必ずやわれらが後塵を拝することになるだろう。われわれはこの世の開拓者であり、われらのものである「新世界」に新たな道を切り開くべく、未開の荒野に送り出された前衛なのだ。(V、一五一)

ここに見られるのは、いわゆる契約思想で捉えられたアメリカだろう。¹⁰⁾自らをアブラハムの後裔とみるニュー・イングランド・ピュリタンにとつて、新世界とは、乳と蜜の流れるカナンの地、すなわち「約束の地」にはかならなかつたが、ここで提示されるアメリカは、正にこのようなものとしてのアメリカである。新世界とは、コロンブス以前から求められた「彼岸の世界」であり、それは、「神のみこころのまま」創造されたものである。そして、そこに住むアメリカ人は、「特別に選ばれた民——すなわち現代のイスラエル人」であり、しかもそのアメリカ人に、「神は偉大なることを予定された」のである。

見事なまでに典型的なアメリカ像と言わねばならないが、このようなアメリカ像は、この時期のメルヴィルに関する限り、どうやらその意識の深層に底流するものであつたらしい。これらの作品ときほど時を隔てずに書かれた匿名のエッセイ「ホーソンとその苦」(二八五〇)では、次のような言葉が記される。

ボストン人の陋習であるイギリスへの文学的ゴマスを、われわれは断ち切るうではないか。どちらかがゴマをすらねばならないとすれば、われわれでなく、イギリスにこそそれをさせようではないか。いづれ遠からず彼らはそうせざるをえなくなるのだ。今世紀の終り頃に待ち受けていると預言されている、世界のなかでのわれわれの政治的優位に向けて、われわれは手早く準備しているが、文学的に見た場合には、悲しいほど不用意だ。これまでではそれでも良かったかもしれないが、しかしもはやそうでなければならぬ十分な理由はない。しかも、これを正すことは実に簡単なことなのだ。すなわち、優れている

ところはどんな点でもすべて自由に認めるとしても、いたずらに外国の作家をたたえるのは控えるべきであり、一方われらが同胞である優れた作家は、相応に認めてやらねばならない、ということなのである。彼らは、キリスト教という自由で民主主義的な精神の中に生きているのであり、この精神こそいまやこの世界を現実的に導くものであり、そしてそれは、かならないわれわれアメリカ人によってなされるものなのだ。(IX、二四九)

元来このエッセイは、新世界によりやく出現した天才作家ホーソンの、「闇の力」すなわち「内的墮落と原罪」というあのカルヴィンの感覚」(同、二四三)を讃えるものである。換言すれば、先輩作家ホーソンの、「雷鳴のごとき、否！」という姿勢への、深い共感を語るものである。その意味でこれは、ホーソンのネガティブな視座への傾斜を示すものである。だが、と同時にこのエッセイは、上記の一節に明らかなように、新世界アメリカの、旧世界イギリスからの文学的独立を強烈に主張するものである。この意味ではこれは、現実肯定へと傾斜したものであり、そしてその時、肯定するメルヴィルの口吻には、『レッドバーン』や『ホワイト・ジャケット』に見られたあの契約思想の響きが、何やら感知されないであろうか。メルヴィルの見るところ、今やこの現実世界を導くのは「われわれアメリカ人」なのであり、その政治的優位も、世紀の終り頃には「待ち受けていると預言されている」のである。

ところで、ここで注目したいのは、このようなアメリカを導くものとして、「キリスト教という自由で民主主義的な精神」が言及されていることである。この言葉は、このエッセイを、続く作品『モウビー・ディック』へと連結するものだろう。

『モウビー・ディック』は、知られるように、きわめて象徴に富む。しかし、その象徴性は、キリスト教、それも新世界アメリカにおけるそれと、密に関わる。神のごとき鯨を追い、旧約の暴君アハ

ブと名を重ね、「アダム以来全人類によって感知された怒りと憎しみのすべて」(Ⅵ、一八四)を体現し、「十字架上のキリスト」(一二四)でもあるエイハブは、もちろんニュー・イングランドはナンタケット生まれの、クエーカー教徒である。スターバックやイシュメイルも同様である。スターバックは、エイハブ同様クエーカー教徒であり、一方イシュメイルは、「不謬のプレスビテリアン教会の懐で育まれた」(五二)若者である。

ところが、このような構図を内包する作品『モウビー・ディック』は、その内に、実は「民主主義」をも取り込む。たとえばスターバックに言わせるならば、エイハブ船長は、「上にあるものすべてに對する民主主義者」(一六九)であり、語り手イシュメイルも「民主主義」に関しては無関心ではない。エイハブに逆らうスターバックの勇氣は最終的に萎えることになるが、そのスターバックの心の氣高さを讃えるイシュメイルは、それを敷衍する中で、「民主主義」と「神」とに触れ、こう述べる。

しかし私の言うこの確固たる威厳とは、王とか衣装とかのそれではなく、衣装などとはならん関係のない、あの豊かな威厳なのだ。それは、つるはしをふるい、釘を打つ腕から輝き出るもの——あらゆる方向にむかって、神から無際限に放射するあの民主的威厳、すなわち神そのものなのだ！偉大にして、絶対的な神！あらゆる民主主義の核にして周縁！神の遍在、そして聖なるわれらが平等！(一一七)

こう語るイシュメイルの口調は、いかにも若い語り手のそれに適わしく、かなり熱っぽいものである。ところがこの「民主主義」をめぐる熱っぽさは、作者メルヴィルのものでもあったらしい。この時期ホーソンに送られた手紙の中でメルヴィルは、「四方八方に私にばらまいてある情容赦のない民主主義」⁽¹²⁾について言及し、「あらゆるものに無条件に民主主義を認めながら、同時に、集団としての

人間に嫌悪感を抱くこと——これは矛盾しているように見えるかも知れませんが、しかしそうではありません」⁽¹³⁾とも語っているのである。しかもこの数週間前には、「あらゆる権力と對等の立場で交渉する」⁽¹⁴⁾ことへの強い共感も書き送っているのである。

とすると、多様な読みを誘発する、象徴に富む冒険ロマンス『モウビー・ディック』は、実は「キリスト教という自由で民主主義的な精神」を一本の柱とする作品と思えてくるが、このような事情は、次作『ビエール』(一八五二)にも多分に当てはまるだろう。

ベントリーへの手紙によると、舞台を陸に移したこの作品でメルヴィルが意図したのは、「新鮮で心たかぶるアメリカの生活」⁽¹⁵⁾を描くことであつた。ところがこの「アメリカの生活」の主役を演じる青年作家ビエールは、「完璧なデモクラット」(Ⅶ、一三)であると同時に、「(義務への熱誠者)としてキリストと化す」(一〇六)人物である。そして、そのビエールが歩む世界は、乳と密の流れるユーロピアと言うべき、ニュー・イングランドの牧歌的緑の世界サドル・メドウズであり、あるいは「政治的および宗教的至福千年」(二六九)が風靡する、ニューヨークと覚しき東部の大都会なのである。その上、その次第を語る語り手の視点は、「民主主義」と「神」とを熱っぽく語ったイシュメイルよろしく、「この国では民主的要素というものが妙なる酸の働きをし、絶えず古いものを腐蝕して、新しいものを産むのだ」(九)と語るものなのである。

このようなメルヴィルの言葉を眺めると、その背景として、当時の精神風土を指摘しないわけにはいかないだろう。当時の精神風土と言えは思い出されるのは、『ビエール』でも言及されるトランセンデンタリズム(超越主義)のそれであるが、以上見たようなメルヴィルの視座は、超越主義者のそれと意外と近い。たとえばその中心人物エマソンとの対比で言うならば、「私たちの作品、私たちの法、私たちの信仰を求めようではないか」(「自然」序)⁽¹⁶⁾と時代に呼びかけるエマソンの姿勢は、イギリスからの文学的独立を主張する

ホーソン論のそれと相通するものであろうし、「(普遍者)の流れが私の全身をめぐる、私は完全に神の一部」(「自然」¹⁷)というエマソンの感覚は、「神の遍在」を熱っぽく語るイシュメイルのそれと、ごく接近したものと云ってよいだろう。

むろんトランセンデンタリズムが当時の唯一の精神風土であったということにはならない。しかし、エマソンやメルヴィルの精神が育まれた時代という意味で、いわゆる「ジャクソニア・デモクラシー」という角度から眺めても、やはり同様のことが言えるだろう。この風土の仕掛け人ジャクソンは、大統領の任務を終えるに当り、国民に向って、「あなたがたは最高の信頼を託されている。神の摂理は恵み深いこの国に無限に注ぎ、神はあなたがたを、人類の福祉のため、自由の守護神として選ばれたのだ」(「別れの言葉」¹⁸)と語ったが、このようなジャクソンの言葉は、メルヴィルのそれと実によく符合するものである。

二

ジャクソンのアメリカ像は、ピューリタンのそれに連なるといふ意味において、いわば正統的アメリカ像を代表するものだろう。すると、同じくメルヴィルも正統の系譜に連なることになるが、しかしメルヴィルのアメリカ像をいま少し些細に眺めると、どうやらそこには反正統的、あるいは異端的とも言うべきアメリカ像も姿を見せる。

処女作『タイビー』(一八四六)もこの例外ではない。この作品の舞台は、文明化の波に洗われつつあるマルケサス諸島である。しかし、この未開の地での体験談は、同時に、キリスト教文明国としてのイギリス、フランス、アメリカ合衆国等への、批判的視線を伴ったものである。たとえば母国アメリカに向ける視線は、きわめて否定的なものである。「華やかな文明社会から生み出されるさまざま

まな悪行、暴力、残虐などを思えば、相対的な悪質さと言う点から見て、四、五人のマルケサス島民を宣教師として合衆国に送り込んだ方が、同じ数のアメリカ人をここに送り込むよりよほどましではないかと思われる」(I、一二五)のである。未開の地にキリスト教を伝え、その地に「丘の上の町」を建造することは、宣教師にとつて、先の大ワイトの詩にも見られたように、神の栄光をもたらすこと以外の何物でもなかったが、ここにあるのは、そのようなものとしてのキリスト教文明への、痛烈な揶揄である。アメリカ国内でこの作品の検閲版が用意されたのは、決して不思議なことではない。¹⁹

しかしこのような否定的視座は、第三作『マーディ』においてより具体的である。幻の少女イラーを追うタジ一行が作品後半部で訪れる共和国ヴィヴェンツァは、すなわち国家アメリカのカリカチュアである。この共和国では「すべての人は自由かつ平等に生まれ」(III、五二二)ているのであり、また彼らが訪れる「両極の間」(同)に位置する町は、つまりは南部と北部の接点に置かれた町ワシントン²⁰を想起させる。のみならず、当地の「自由の大寺院」(五四一四)で折しも熱弁を奮っている人物アランノは、当時ワシントンで現実に熱弁を奮っていたオハイオ州選出上院議員アレンを彷彿させる。

このような共和国ヴィヴェンツァは、見たところ希望と栄光に満ちみちている。一行の一人、哲学者ベブランジャに言わせれば、ドミノラ(イギリスのカリカチュア)が、「最後にして最大の(古代)のアナク」(五二〇)とすれば、ヴィヴェンツァは、「最新にして最善の(現在)の子」(同)である。そして、「一方は過去に満ち、他方は未来に満ちる」(同)。一方タジに言わせれば、「朝日のように約束に満ちた」(四七二)この国は、聖ヨハネやメシアの相貌さえたえた聖なる国であり、すなわち「いなごと野蜜を食物として、予言者の声で荒野から人々に叫んだ聖ヨハネ」(同)的国家、そし

て「ひげを生やしたラビたちが耳を傾ける若きメシア」(同)的國家なのである。

しかしこのようなヴィヴェンツァは、実はこの共和国の一面を示すものでしかない。というのも、あふれるばかりの聖なる光の背後には、無視しえない闇の世界が控えているのである。その闇の世界の最大のもものは、国家理念の根幹に関わるものであるが、というのも、なるほどこの共和国は「すべての人は自由かつ平等に生まれた」を国肯としたが、ところがこれは「ただしハモ族を除く」(五一三)という、のっぴきならない条件を伴ったものであったのである。さりげなく加えられたこの一つの付帯事項は、光の国ヴィヴェンツァを一瞬にして闇の国へと暗転させるに十分である。この国の南部でやがて一行が目にしたのは、実際「醜きこと地獄の火のごとし」(五三四)という、奴隷制の忌むべき光景にはかならない。

いま一つ、同様の闇は、この国の一般的性格、あるいは国民性に関わるもので、すなわちこのメシアの国が「マーディにおけるブラガドッチオ」(四七二)であるということである。ブラガドッチオとは、スペンサーの詩に出てくる言葉であり、「誇り高き男」を意味する。⁽²¹⁾従ってここでは、過度なまでにおのれを恃むシヨロビニズムに満ちた国家像が浮かび出る。ヴィヴェンツァ人の行動は、これを確かに裏付ける。彼らはしばしば「誇りに満ちた鶏冠を立てがち」(同)であり、しかも「よその国を取り崩し、少しづつ自分の国に加え」(五三六)ているのである。むしろこれはメキシコ戦争当時のアメリカの国家的行為を揶揄するものに相違ないが、しかしこのような国家ヴィヴェンツァを、正しく光あふれる約束の国と呼ぶわけにはいかない。

かくして光の国ヴィヴェンツァは、大なる闇を宿した国ということになるが、どうやら事情は『レッド・バーン』でも同様である。先に見たウィリンバラのアメリカへの讃辞は、確かに熱烈なものである。しかしこれには実は対極に立つ視点が同伴する。同行の一人、

船乗りラリーに言わせれば、「マダガスキーには、くだらぬ乞食も、いやなお巡りもない。痛風で痛む親指をひきずる王様もない。アメリカンキーなんぞ糞くらえ」(二〇一)である。シウィライズ(文明化)とは、すなわちスニヴェライズ(漢をたらすこと)と駄じやれをとばすラリーの目からすれば、文明国アメリカンキーは、否定されるべき対象でしかない。

ところがこのような視点は、主人公ウィリンバラのそれとも無関係ではない。旧世界リヴァプールで黒人が「人間らしく顔を上げて」(二〇三)のを目にした彼は、「独立宣言の冒頭に記してある原理の実行をわれわれアメリカ人は他国に委ねている」(同)という事実を、改めて目覚めるのである。また移民船の悲惨な現実を目の当りにすると、キリスト教文明社会に内在する理想と現実の落差について、次のように思いを深くせざるをえないのである。むしろここでウィリンバラは、アメリカという限定的空間よりも、むしろキリスト教文明世界一般を念頭に置いているのかもしれない。しかし、先の言葉に見られたように、キリスト教社会の先導的役割をはずすべき存在がアメリカであるとすれば、ここにみられる絶望感、すなわち新世界アメリカに対するそれと見てよいだろう。

われわれはしばしばトルコ人のことを口にし、食人種を毛嫌にする。しかし、彼らのうちの何人かのほうが、われわれの何人かよりも先に、天国に行かないであろうか。われわれは文明化した肉体を持っているが、野蛮な魂も持っている。われわれはこの世の現実の姿に盲目で、その声を聞く耳も持たず、その死にも無関心だ。だから、ひとつの悲しみが万の喜びよりも重いことを知るまでは、われわれがキリスト教の求めるものになることはありえないのだ。(二九三)

『ホワイト・ジャケット』もこの意味では共犯である。なるほどここでは、「約束の国」としてのアメリカばかりでなく、その「民

主義」も強く弁護される。鞭刑という蛮習が批判されるのは、それが「民主主義という精神にとって忌むべきもの」(一四六)だからであり、平水夫の出世の困難さが嘆かれるのは、アメリカの水兵はすべて「フリゲート艦の艦長をめざす自由があつていい」(一一四)からである。しかし、にもかかわらずこの視座は、アメリカへの、ひいてはキリスト教文明社会への、深い懐疑を垣間見せる。艦上牧師の存在理由にふとしたことから疑念を抱くホワイト・ジャケツトは、至福千年やキリストの言葉の非現実性へと思考を巡らし、こう述べる。

われらが軍艦の世界における最高の正義も、結局のところ実現される理想ではない。「至福千年」をもたらすべく異教徒に口やかましく説いているその教えも、われわれキリスト教徒自身が無視しているのだ。そもそもキリスト教の柔和さを現実に入れられるには適していない。現在のこの社会の枠組を思うと、われらが聖なる救世主は、天国の叡智で満ちてはいたが、その教えは、血なまぐさい殺人や戦争を時には国家が必要とすることを正しく認識する点において、あるいはまたた地位や肩書きやお金の価値を正しく評価するという点において、この世の現実的叡智に欠けることがあると考へても、ほぼやむを得ぬことのように思えるのだ。(三三四)

キリスト教徒の偽善性を抉り、救世主の言葉の非現実性を指弾することは、アメリカそのものを否定することと、直接はつながらない。それはむしろ、アメリカへの期待の高さの反動であるかもしれない。しかし、続く作品『モウビィ・ディック』や『ビエール』へと目を転じると、このような視座が実はかなり根の深いものであることがわかる。

エイハブとビエールは、先に見たように、民主主義国家アメリカを十分に体現する。エイハブは「民主主義者」であり、ビエールは

「デモクラット」なのである。ただしこれには、実は付帯条件がある。エイハブは「上にあるものすべて」(Ⅵ、一六九)に対する民主主義者であり、一方ビエールは、「多少過激な」(Ⅶ、一三)デモクラットなのである。

そして、この二人の精神の内質は、キリスト教という角度から眺めた場合、かなり危険な力を潜めたものである。たとえばエイハブは、主樁に釘打たれたスペイン金貨を眺め、その凶柄を巡って次のような瞑想に耽る。

山頂とか塔とか、なんであれ雄大で高いものには、つねにどこか自我に満ちたところがある。これを見ろ——悪魔のように誇り高い三つの峰。堅固なる塔、これはエイハブだ。火を吹く山、これもエイハブだ。勇敢で、おそれを知らず、覇気に満ちた鳥、これもまたエイハブだ。みんなエイハブだ。そしてこの丸い金貨は、まんまるい地球の似姿そのものだ。でこれは、魔法使いの鏡よろしく、見る人それぞれに、とらえ難い自我の姿を映し出してくれるのだ。(四三二)

一方ビエールは、大都会の寒空の下、故郷の「タイタン山」を思い浮かべ、その中腹にある「エンセラダスの岩」の、次のような幻像を見る。

しかしもはや屈辱の姿勢に身を屈めることなく、巨人たちは一斉に立ち上がり、山の端を駆け登り、物言わぬ断崖の絶壁に、新たな攻撃を仕掛けたのであった。その先頭に立つのは、昔のターバンを頭に巻いた腕亡き巨人——その巨人は、癒しがたき憎悪を発散させる道はほかにはないと思ひ定め、おのれの巨大なる胴体を破城つちとして、難攻不落のその山に、一度また一度と、あばらのとびでたその体を、打ちつけるのであった。(三四六)

エイハブやピエールのこのような精神構造は、さまざまに読み解くことが可能だろう。われわれはここに十九世紀ロマン派特有のギリシャ悲劇的ヒューブリスを見ることもできるだろうし、キリスト教世界で言う「悪魔」(ルシファー・デビル・アドバーサリー・サタン)の複合的な姿を見ることもできるだろう。あるいはまた、カルヴィニズムの流れを汲むニュー・イングランドの過激なプロテスタントイズムの頭れを見ることも可能だろうし、そのプロテスタントイズムの厳しい倫理観によって抑圧されたアメリカ人の、「イド」を垣間見ることにも可能だろう。あるいは更に、エマソンの「自己信頼」の歪んだ形を認めることもできないわけではあるまい。⁽²⁷⁾

しかしここで注目したいのは、このようなエイハブやピエールが、実は『マーディ』のヴィヴェンツァを想起させることである。「ブラガドッチオ」であるヴィヴェンツァが、「誇りに満ちた鶏冠」を立てがちであったことはすでに見たが、エイハブやピエールは、この意味では典型的なヴィヴェンツァ人である。スペイン金貨に没入するエイハブは、文字通り「覇気に満ちた鳥」に相違ないし、一方、巨大な山に「身を屈めることなく」立ち向かう岩塊を思うピエールは、このようなエイハブ像へと、滑らかに横滑りする存在だろう。とすると、光と闇とを混在させたアイロニカルなヴィヴェンツァの世界は、ここでも再び姿を現すことになる。

だが、とすれば新世界アメリカは、光と闇の二つの地平のうち、はたしていずれにより深く根を下ろすものなのか。

三

メルヴィルが魅せられているのは、何と言っても、矛盾や曖昧さである。メルヴィルほどこれを鋭く感じ取ったものは、いまだ一人とされていない。この矛盾や曖昧さは、人間の条件に内在するものであり、またこれは、思考力の弱いものが思考の代用品として好んで用いるあ

りきたりの逃げ口上を避けようとするれば、つねに人が直面し、格闘しなければならぬものである。『タイビー』から『ピリー・パッド』まで、何らかの形でメルヴィルの心をとらえているのはこれであり、これこそ、ほかの何にも勝って、メルヴィルの想像力の特質を決定するものである。⁽²⁸⁾

メルヴィルの想像力の特質と言えば、リチャード・チェイスの言葉はおそらくその正鵠を衝くものだろう。「曖昧なるもの」とはすなわち作品『ピエール』の副題でもあったが、チェイスの言う「矛盾や曖昧さ」が、メルヴィルの作品にしばしば顔を見せることは確かである。善と悪、天と地という二つの力に引き裂かれ、「無こそ実質なり」(二七四)という虚無的立場に立たざるをえないピエールにとって、世界は紛れもなくこのようなものに満ちみちていたに相違ないし、「腕をふりかざすこのエイハブは、エイハブなのか、神なのか、それとも誰か別人なのか」(五四三)という、無間地獄の懐疑に駆られるエイハブにとっても、おそらく世界は似たような相貌を呈するものであったろう。

このような矛盾と曖昧さは、メルヴィルの場合、内容にのみ認められるわけではない。形式においてもこれが顕著であったことは、たとえば『マーディ』の物語が途中で急変することや、『モウビー・ディック』の特異な構造を一瞥すれば明らかである。

ところがこの矛盾と曖昧さは、以上見たアメリカ像に関してもかなりの程度あてはまる。ヴィヴェンツァ共和国を一例とすれば、たとえばそこで目撃された「醜きこと地獄の火のごとし」という奴隷制の現実、訪れたタジ一行の心を強く捉える。ところが、ではこれをどうすべきかという段になると、一行の議論はまことに要領を得ない。「彼らは幸せなのだ」(五三二)と豪語する奴隷所有者ナリーの言葉に対し、この場のまとめ役たるべき哲学者ババランジャの言葉は、「この巨大な仕組みのため人の心は泣いているが、しかし然

るべき救済法となると誰にもわからない。であれば北部を責めてはならないし、南部も正しく理解してやらねばならない。これは国家としての責任が生じる以前からその内部に植えつけられたものであり、こういうものの根は深いのである」(五三四)というものである。論理や言葉を弄ぶのがこの哲学者の特性であることを思うと、この言葉自体はいかにもバランジャらしいと言えなくはない。しかし、自由平等というヴィヴェンツァの国家理念が、「ハモ族を除く」という付帯事項で諷刺されるその辛辣さを思うと、奴隷制に関する見解を総括すべきこの言葉に見られる折衷的視点と、この辛辣さとの間に、一貫性の欠落したある種の落差を認めることはできないだろうか。

同様のことはスクロール(掲示物)の場面でも生じる。ヴィヴェンツァ北部で一行が目にするこのスクロールは、海の方の革命の炎に市民が呼応するのをたしなめる性格のものである。すなわち、自由と平等を国肯とするヴィヴェンツァ市民に対し、「シーザーの下での自由」(五二八)もありうることに、またどれほど革命を実現しても「悪は宇宙の慢性病」(五二九)であり、「一方を拒めば他方が跳び出す」(同)という現実を説くものである。この意味ではこれは、群衆の一人がいみじくも叫んだように、「保守派、王党派」(五三〇)的なものである。

ところがこの作者をめぐるって、同定作業が奇妙に韜晦される。書き手として当初示唆されるのは、一行のうち二人、王メディアと哲学者バランジャである。すなわち、この場面に先立ち、二人がなぜか一行の中に見当らなかったとされるのである。ところが最終的にこの同定の問題は、「この問題の結着は今から四、五百年後のマーディの注釈者に委ねなければならない」(同)と留保されてしまふのである。「保守派、王党派」の立場からのヴィヴェンツァへの視座は、作品『マーディ』におけるアメリカへの視座の一つを示唆しうるものに相違ないが、ここにおいてその視座の存在感は、メ

ディアやバランジャのそれとして肉化されることなく、一気に稀薄なものとなってしまふのである。

この種の稀薄化は、『レッドバーン』のアメリカ像に関しても言える。先に見たように、船乗りラリーに取って、文明国アメリカは「糞くらえ」という存在であったが、しかしこれは飽くまでラリー個人のアメリカ観に過ぎない。作中には他にも、たとえば「それぞれの文明観においてラリーと決して意見を同じくしなかった」(一〇一)という人物ガンデックも存在するのであり、このガンデックは、「文明世界を見、愛し、それを住むに良き世界とした」(同)のである。一方、文明世界を糾弾するラリーにしても、訪れた町リヴァールの威容を前にすると、「アフリッキーの海岸も、これじゃまったく顔色なし。マダガスキーにも、ほんと、こんなところはありあしない」(一二七)と、文明世界へのそれまでの否定的視座を、いとも簡単に逆転させてしまふのである。とすると、作中での文明への視座は、一定の距離を置いて冷静に眺められなければならない、ということになる。

たぶんこれは、メルヴィルにおける文明の問題の複雑さを示唆するものだろう。文明が、否定され、憎悪されるべき一面を持つものであることは、どうやらメルヴィルの場合確からしい。たとえば短篇「コケッコォー」(一八五三)を覗いてみれば、文明が激しい憎悪の対象であることが明らかである。当時のアメリカ文明の格好の象徴である鉄道が、ここでは「モロクのような巨大アブ」「ラクダに跨るアジアコレラ」「殺人特許人」(Ⅹ、二七〇)等と、完膚なきまでに罵倒されるのである。

しかしながら、メルヴィルにとつて文明の問題がそれほど単純なものではなかったことは、マルケサス諸島の未開の谷にルソー的地上の楽園を見出した若者トンモが、最終的には「家」と「母」(Ⅰ、二四八)としての文明社会へ、立ち帰らざるをえなかったところにも見られるだろう。キリスト教社会に生きるエイハブやインシュメイ

ルが、フェダラーやクイックエッグという異教世界の人間と深い絆で結ばれるのも、この辺の事情を証すものだろう。メルヴィルの未開世界での冒険譚を読んだロレンスは、「われわれは未開人へと立ち帰ることはできない、一歩たりとも」と記したが、メルヴィルにおいて文明とは、たとえそれを否定しても、その対極に安住することともまた疑わしいという、矛盾と曖昧さを抱えたものであったらしいのである。

かくしてアメリカ像はここでもまた不透明な輪郭を提示することになるが、ここでいま一つ眺めておきたいのは、アメリカ像の具現化としてのエイハブとピエールの場合である。

アメリカを具現する人物像と言えば、思い出されるのは、あの「アメリカン・アダムの」姿である。W・B・ルイスによると、このアダムは、「歴史から解放され、祖先と気楽に手を切り、家や民族というくびきから汚れなく逃れる個人——自分の内なる力を信じて、待ち受けているいかなる困難にも、臆することなく堂々と立ち向う人」⁽³¹⁾である。そしてルイスの見るところでは、たとえばエイハブは、「幻滅により狂気に走ったアダム」⁽³²⁾である。

しかし、エイハブやピエールはさて置いて、このようなアダム像は、実はメルヴィルの場合かなりの比重を占める。独立戦争の英雄イーサン・アレンが『イスラエル・ポッター』(一八五五)の中で次のように描かれる時、われわれが思い浮かべるのは、アメリカ精神の発露としての「アメリカン・アダム」の姿だろう。

アレンは、ヘラクレスやジョー・ミラー、ベイヤードやトム・ハイヤーが奇妙に混じり合ったような男であり、その身体つきはベルギーの巨人、口にはスイス人のように山の歌、そしてその心はライオンのように悠然たるものであった。ニュー・イングランドの生まれとはいえ、その面影は微塵もなく、率直にして剛胆、異教徒のように気さくで陽気、言ってみればローマ人、なんとも気の良い人物であった。そ

の精神は、心底西部のものであったが、実はここにこそ彼特有のアメリカ性が存在する。それというのも、西部の精神こそ(というのも、他にはないし、ありえないからだ)が、真のアメリカの精神であり、これからもまたそうなのだ。(Ⅷ、一四九)

独立戦争を舞台とし、「七月四日の物語」という副題を持ち、七月号の雑誌に当初掲載されたこの物語が、「アメリカ」を射程に入れたものであることは論を俟たないだろう。とはいえこのアレンをエイハブやピエールと単純に括することは危険である。アレンが代表するのは「西部の精神」であるが、ナンタケットやサドル・メドウズに根を持つエイハブやピエールは、さしずめ「東部の精神」の顕現者である。だが、この「タイタニックなパーモント人」(一四九)アレンが、捕虜として敵国で一歩もひるまず、「松の木や尖塔や巨人に相応に付随するあの避けがたい自我主義」(同)を発散する時、この三人は一気に手を結ぶだろう。三者はともに「自我主義」という一点で共軛されるのである。

しかしここで注目したいのは、アレン以外にもアメリカ精神を顕現する人物が『イスラエル・ポッター』には現われることである。たとえばベンジャミン・フランクリンやジョン・ポール・ジョーンズは、かなりの程度アメリカ精神の体現者として姿を見せる。「蛇と鳩」「外交家と羊飼ひ」(四六)とを共存させて、「どうみてもずるい、ずるい、ずるい」(五四)人間であるフランクリンは、つまりは「生まれた国の典型」(四八)なのである。一方ポール・ジョーンズは、文明社会アメリカの、その暗い内質と符合する。

この戦いには何やら不思議に示唆に富むところがある。原形と、相似と、予言とが、一つになっているらしいのだ。イギリスと血を同じくしながらも、二度にわたってその敵となり、しかも、その恨みつらみを、心底忘れることもできない。猛烈な野心家で、大胆にして奔放、

向こう見ずにして貧欲、文明面はしているが、心は野蛮——アメリカは、世界の中のポール・ジョーンズであり、これからだってそうかも
 しないのだ。(二二〇)

アレンのそれに比べると、二人のイメージはかなりネガティブなものである。しかしこれら三つの人物像を並べてみれば、アメリカ像が単一なものでないことがわかる。「自我主義」を宿したアレン的「西部の精神」も、フランクリンに見え見えのヤンキーの実利主義も、ポール・ジョーンズの文明面した野蛮性も、アメリカはすべて併呑するのである。多様性や多義性が、矛盾や曖昧さと連動するものとするならば、メルヴィルの視座は、ここでもまた健在であるとしなければならない。

ところでこの視座は、『イスラエル・ポッター』以後、更に堅持され、むしろ深化される。「ベニト・セレノ」(一八五五)や『詐欺師』(一八五七)の世界は、このような視座の道行きを雄弁に語ってくれるだろう。

奴隸船上での奴隸の反乱をテーマとする「ベニト・セレノ」は、優れて新世界アメリカを主題とする。反乱の舞台となる奴隸船サン・ドミニク号は、いかにも象徴的に、「新世界の発見者クリストファー・コロンブス」(X、一〇七)を、その船首に飾っているのである。そしてその世界に歩み入るのは、マサチューセッツ生まれの生粋のアメリカ人アマサ・デラノ船長である。しかもこのデラノ船長が「人を疑うことを知らないきわめて人のよい人物」(四七)で、「諷刺や皮肉を理解できない生来の単純さ」(六三)を備えた人物である時、ここにごく自然に浮かび出るのは「墮落以前のアダム」とされるあの「アメリカン・アダム」の姿である。³⁴⁾

ところがこのデラノの歩む世界は、欺瞞に満ちた反乱の世界であり、その次第を語る作品そのものも、また多義的世界を豊かに内蔵するものとなっているのである。実際、「すべては灰色であった」(四

六)という作品冒頭の一句は、この多義性を象徴する見事な修辞と言ってよく、カバナーの言葉を借りるならば、今や「ベニト・セレノ」という言葉は、「洗練された懐疑と曖昧さ」³⁵⁾を意味するものとさえなっているのである。

しかし「洗練された懐疑と曖昧さ」という点では、『詐欺師』も例外ではないだろう。メルヴィル最後の長編小説であるこの作品は、稀代の詐欺師の行状を語るピカレスク的物語である。しかしこの作品は同時に、新世界アメリカをも照射する。かつてクレブールは、「アメリカを正しく眺め、そのかすかな始まりと野蛮な残滓とを正しく捉えたい者は、辺境の広大な地を訪れて見なければならぬ」³⁶⁾と記したが、ここにあるのは正にこの「辺境」の地であり、そしてあの「西部の精神」なのである。すなわち、「ここにあるのは、あらゆるものを呑み尽くす西部の精神、ミンシッピーがその象徴」(X、九)という世界である。

ところでこのミンシッピーが、すなわち「自信に満ちた(コンフイデント)、世界的な(コスモポリタン)川」(同)であるとすると、それが象徴する「西部の精神」を作中最もよく体現するのは、もちろん主人公である詐欺師だろう。何しろこの人物は、自らコスモポリタンと名乗る詐欺師(コンファィデンス・マン)なのである。ところが、この人物を中心に織り成される物語の世界は、実に捉えがたい。度重なる変装、巧妙な論理、際限のない言及、話題の逸脱など、物語の世界は、ただただ拡散するばかりなのである。しかも、最終的にこの主人公は、「闇」(二五一)の中へと紛れ、後にはただ「この仮面劇はさらにいくばくか続くであろう」(同)という、不毛の言葉が残されるのみなのである。

もちろん詐欺師以外にも「西部の精神」を発散する人物は登場する。ミズーリ男ピッチであり、イリノイのインディアン憎悪者モアドック大佐である。しかし彼らとて一筋縄でいく人物ではない。たとえばミズーリ男ピッチの場合、熊皮の服を着て二連発銃を手に持

ち、そして詐欺師コスモポリタンを、「観念の遊び屋」(二二五)「形而上的ヤクザ」(一三六)と切つて棄てるその姿は、いかにもイーサン・アレン的で、剛毅にして、かつ鋭い。しかしコスモポリタンに言わせるならば、この人物はその素性からしてすでに怪しげなものであり、「やつの生まれはミズーリではなく、アレゲニーの向こうから来た人間嫌い」(二六九)ということになる。

モアドック大佐の場合、何よりもその精神構造がすでに巨大な矛盾を抱える。敬虔なキリスト教徒として「人間を愛する心がないわけではなかった」(一五四)この人物が、イリノイの辺境で身に付けたのは、「兄弟は愛されて然るべし。ただしインディアンは憎まれて然るべし」(一四六)という、矛盾を孕んだ論理であつたのである。

このような精神がつまりは「西部の精神」の縮図であるとするならば、それに代表されるアメリカ精神とは、矛盾と曖昧さとを横溢させた、限りなく「闇」に接近したものと言ふほかないだろう。この「闇」の世界が、あの「灰色」の世界とおそらく同一の地平を共有するものであることは、もはや贅言を要すまい。

四

冒頭で言及した作品『戦争詩集』は、この『詐欺師』の後を襲う作品である。しかし『詐欺師』と『戦争詩集』との間には、時間的形式的に、大きな懸隔がある。小説家メルヴィルは『詐欺師』で擱筆し、再び起筆したメルヴィルが『戦争詩集』を世に問うのは、ほぼ十年後のことであり、しかもその作品は、小説でなく、詩であつたのである。

しかしアメリカ像という角度から眺めれば、二つの作品の間に認められるのは、懸隔というよりも、むしろ連続性だろう。というのも、処女作『タイビー』から『詐欺師』へと続く一連の作品で提示

されたのが、契約思想で縁取られつつもその内に闇を宿したアメリカ像であつたとすれば、南北戦争を素材とするこの詩集においてもこれはかなり顕著に見て取れるものなのである。

たとえばこの詩集に、「約束の国」としてのアメリカの姿を探ることは、さほど困難なことではないだろう。詩「不安」や、同じく詩「確信の衝突」を例に挙げるならば、そこで歌われるのは、今まさに戦乱の嵐に襲われようとする「麗わしき希望の国」(十三)の姿であり、失われるであろう「建国者たちの夢」(十七)である。しかもこれらは、しばしばミルトンの『失樂園』的構図で捕捉されるのであり、詩「ゲッチスバーグ」に典型的に見られるように、南と北との対決は、つまりは「ダゴンの神」(八四)と「聖なる大義に導かれたわれらが箱舟」(同)、すなわち「不敬な心」(同)と「神」(同)とのそれにはかならないのである。そして来たるべき世界とは、摂理により約束された栄光の国アメリカである。

未来の空に輝く光を見れば、

さまざまに暗い予言も自然に姿を消す。

アメリカへの信頼、絶えて消えることなく、

必ずや天は、定められた目的を果たすであろう。

だからわれらは、摂理とともに陽気に進むのだ。

(「議事堂でのリー」、二三七)

ところがこれは、実はアメリカ像の一面を示すものでしかない。詩「不安」で描かれる「麗わしき希望の国」は、現実には「人間の最も汚らわしい罪と結ばれた」(十三)国であり、「確信の衝突」で言及される「建国者たちの夢」にしても、「消滅するであろう」(十七)という暗い予感を孕むものである。一方、詩「屋根」で歌われるように、聖なるべき北部の世界で発生した一事件(徴兵への腹いせとして白人が黒人を襲った事件)は、つまるところ「カルヴ

インの教義を裏付ける」(八七)ものであり、同時にこれは「共和国信仰への暗い誹謗」(同)を宿したものである。とすると、来たるべき栄光の世界は多分に幻想でしかないということになるが、詩「亡霊」の次のような一節は、この辺の事情を十分にその視野に含むものだろう。

だからすなわち、固さとは皮殻——
足下には炎の核——

長年何事がなくても、

このようにして生まれる恐怖を、

誰が恐れなしに思い描けるであろうか。(一五五)

『戦争詩集』への一つの視点として、ここに「根本的にアイロニカルな存在の二重性」³⁸を見る見方がある。確かにここでは、たとえ南と北という対立する二つの「確信」に限らず、理想と現実、老いと若さ、運命と自由意志といった二項対立の構図が、繰り返し提示される。詩「亡霊」もこの意味では例外ではない。ここで歌われるのは、緑の大地を突然破壊する噴火に対する恐怖感である。むしろこの場合、噴火というイメージの背後には、南北戦争という歴史的事象が存在しているだろう。しかし、いずれにしろこの恐怖感は、優れて「存在の二重性」に根ざすものである。緑の大地という堅牢な「皮殻」のすぐ下には、実は「炎の核」という恐ろしい力が控えているのである。このような緑の大地が、つまりは約束された新世界アメリカであるとするならば、ここに神の栄光をのみ見ることはもちろん不可能だろう。

さて、冒頭で言及された詩「アメリカ」は、このような脈絡でこそ読み解かれなければならない。

ドームにたなびく旗の下、微笑む女神が目にした「大地は眼下で平和に憩えり」(二六〇)という世界は、いかにも「麗わしき希望

の国」であり、また「建国者たちの夢」の世界である。しかしこの世界は、その内奥に、いわば「炎の核」を宿す。わが子を相戦わせ、戦乱の嵐が、そこには確実に控えているのである。その上、なるほど女神は「汚れを経て浄化」(一六二)し、「賢き希望」(同)を身に帯びて「目には帝国」(同)を望んだが、しかしこれとても、「根本的にアイロニカルな存在の二重性」を解消するものとは思われない。一人岩上に立つ女神の足下では、なるほど光と闇とが絡み合い、「時に闇、光に追われ／遠き彼方の峰へと逃れ」(同)はするが、しかしこの闇が再び巡ることがないという保障は、必ずしも定かではないのである。

このように眺めると、アメリカ像に関する限り、『詐欺師』と『戦争詩集』との間の懸隔は確かに消滅する。詐欺師を呑み込む闇の世界は、女神アメリカの立つ地平にも依然として揺曳するのである。ところがこの世界は、『戦争詩集』より更に十年を経て発表される巡礼詩『クラレル』(二八七六)でも、再び姿を見せる。

アメリカの若き神学徒クラレルを主役とし、その信仰への懐疑を主題とするこの詩は、十九世紀後半ヴィクトリア朝時代特有の信仰懐疑文学の系譜に連なる。³⁹しかし同時にこの作品は、クラレルの母国アメリカを決る作品であると言っている。舞台は聖地パレスチナであるが、四部約一万八千行から成るこの詩を構成するのは、クラレルを始めとして、ロルフやヴァインなど、主にアメリカを背景として持つ人物たちである。しかもその中には、国家アメリカの宗教的背景を示唆するかのように、至福千年を狂信的に信じ込む人物ネヘミヤや、十七世紀ピューリタンを祖先とし、「約束された緑の芝生の地——イリノイ」(五八)に生を享け、汎神論へ、そしてユダヤ教へと走った人物ネイサンなども姿を見せるのである。そして、これらの人物が作中で占める比重も、決して小さいものとは思われない。

しかしアメリカ像を探る場合、とりわけ注目されねばならないの

は、最終第四部で姿を見せる南北戦争の敗残将校アンガーだろう。今では祖国を後にしているとは言え、この人物は、素性からして既に十分にアメリカ的である。「イギリスの頭脳、しかしインディアンの心」(四二四)を持ち合わせているのである。アメリカという国家が、元来インディアンの土地の上に構築されたイギリスの植民地であったことを思うと、アンガーのこの内質はいかにも示唆的である。しかもアンガーは、いま一つアメリカ的性格を身に帯びる。

「勇敢な軍人にして強靱な思想家」(中略)言うなれば、あのイサン・アレン」(四六六)なのである。むしろイサン・アレンとは、先にも見たように、「西部の精神」すなわち「真のアメリカの精神」(Ⅷ、一四九)の権化である。

ところがこのアンガーのアメリカへの視座は、きわめて否定的なものである。南北戦争後のアメリカ社会の民主主義を、「馬に乗った売春婦」「不敬な時代の売女の女王」「やくざな世界の成り上がり」(四七五)と痛烈に皮肉るアンガーは、返す刀で、この社会の現状と未来とを、次のように切つて棄てる。

いか、結局何が起きようと、

つまるところは人それぞれが、

アダムの墮落を新たに確認するだけ。

後続のものがいるかもしれないが、

その姿はもう目に浮かぶもの。

無数のものが小人を演じ、

あるのは下劣な平等、

ものの溢れる世界には、

野蛮な市民がうごめき回り、

人はみな俗人となり、

通俗科学で獣化して、

神を認めぬ口先人間となる。

(中略)

だが、知っているのは自分のことばかり、
しかもつまらぬ間違いだらけ、
はびこるのは、おぎなりの常識ばかり――

まるでアングロ・サクソンの支那帝国が、

民主主義の暗黒時代に、大平原で、

民族の名を汚すというわけだ。(四六三)

このようなアンガーの言葉には、曳かれ者の小唄的性格がないとはいえない。「その手はすべてのものに逆らう」(「創世記」十六・十二)のは、旧約の放浪の孤児イシュメイルであるが、祖国を逃れたこの敗軍の将も、「西部育ちのイシュメイル」(四四)なのである。だが、興味あることに、アンガー的アメリカへの視点は、作中かなりの比重を占めると言ってもいい。「クラレル」の中の精神的核とも言えるロルフは、成熟した知性を感じさせるアメリカ人であるが、新世界に対して取るその立場は、「われわれの新世界は／進んで旧世界を改造したはずであったが／実態はその逆である」(四二二)というものである。一方、アンガーの先の言葉を触発したのは、メキシコ革命の闘士ドン・ハンニバルであるが、このハンニバルは、皮肉にも今では新世界メキシコに失望し、「アジアこそ私のめざす世界」(四七二)とみなしているのである。これらの人物に共通に見られるのは、新世界への屈折した視線であるが、『クラレル』末尾近くには、次のような言葉も見当るのである。

終点に碑を立てようではないか！

コロンブスは地上のロマンスに終止符を打ち、

もはや人類に、新世界はないのだ！ (四八四)

新世界へのこのような視座は、いかにも絶望的で暗いものと言わねばならないが、クラレルの歩みぶりは、作中に遍満するこのよう

な暗さをおそらく反映するものだろう。信仰への確信を求めるクラレルは、幻滅のみを取獲として、さながら詐欺師コスモポリタン同様に、「暗き、オリベツト山を後にして／細い横道を取り／更に、暗い街中へと姿を消す」(五二二)のである。「暗い」世界へと紛れた後はたしてクラレルはどのような歩みを辿るのか、この点に関しても作品は沈黙を守るのみである。

かくして『クラレル』でも、再び闇の世界が姿を現わすことにならる。ただしこの世界は、漆黒のそれではないかもしれない。作品末尾に付されたエピソードでは、「暗い」世界へ歩み出るクラレルに、次のような言葉が送られるのである。

まだ諦めてはいるまいが、だから心を強く持て――

お前の心、クラレルよ、そこにのみ目を向けよ。

そして、雪の下から芽を出すクロッカスのように、

水底から浮かび出る泳ぎ手のように、

そして胸の奥に秘め隠してもにじみ出る

燃えるようなひそかな思いのように――

クラレルよ、荒れ狂う海から現われいでて

死は生を勝利へと導くことを証すのだ。(五二二)

むしろこれはクラレルへの激励の言葉であり、キリスト教を懐疑するクラレルに、光の到来の可能性を示唆するものである。この意味ではこれは、暗い結末を迎えるこの長大な巡礼詩に、一条の光を投じるものである。ただしこれは飽くまでも一条の光であって、それ以上のものではないだろう。激励の言葉が記されるといふこと自体、神学徒クラレルの懐疑の念の深さを示すものかもしれないし、ひいては作品『クラレル』を覆う闇の深さを証明するものかもしれないのである。

この意味で注目したいのは、クラレルが「わが主」(四一八)と

も呼ぶロルフの視座である。新世界に対するロルフのそれが幻滅に満ちたものであることは先に見たが、どうやらこれは、キリスト教信仰の原点たるべき聖地に対しても同様の働きを示す。巡礼の旅の終りに近く、ロルフの口を洩れ出る言葉は、「ベツレヘムにはいるけれど、私が想うのは／正直なところ、そう、タヒチの海辺」(四六七)であり、あるいはまた「タヒチこそキリストの／降臨されるべき場であった」(同)である。

聖地を飛び越えて一気にタヒチへ向かうこのロルフのヴェクトルは、実は作者メルヴィルのそれとも正確に符合する。『クラレル』の素材となる聖地巡礼の日記の中に、メルヴィルは「J・Cはタヒチに現われるべきであった」と記しているのである。むしろJ・Cとは、すなわちイエス・キリストの頭文字に相違ないが、しかしながらメルヴィルは、このユートピアとしてのタヒチが、実は幻想の世界に過ぎないことを重々承知しているはずである。なるほどメルヴィルは「人の魂の中には平和と歓喜にあふれた一個のタヒチ島がある」(Ⅵ、二七四)と記したが、しかしそのタヒチ島の現実には、メルヴィルの見るところ、「心は悲しきキリスト教徒、核の部分は正に異教徒」(Ⅱ、一七八)というものであったのであり、またその未来は、「彼等の前途は暗い。(中略)ヨーロッパの人々と付き合わざるをえない他の未開の人々と同様に、黙って彼らは絶滅を待つのみ」(同、一九二)であったのである。

かくして、新世界アメリカでもなく、聖地パレスチナでもなく、ほかならない失われゆく南海の島タヒチが、すなわち『クラレル』で想い描かれるユートピアであるとするならば、取りも直さずこれは、作品『クラレル』の抱える闇の深さを証すものだろう。求むべき真のキリスト教的ユートピアは、つまるところこの世のいずこにも見出し難いのである。とすれば、アメリカ人デラノの眼前に出現した灰色の世界や、詐欺師を呑み込んだ闇の世界、そしてまた女神アメリカを囲繞した幽暗の世界は、その堅固な存在感を、依然と

してここでも誇示していると言わねばならぬだろう。

むすび

『アメリカの民主主義』（一八三五）の中で、フランス人トクヴィルは、一八三〇年代のアメリカ社会を分析した。詳細なその分析の対象には文学の世界も含まれたが、トクヴィルの見るところでは、アメリカ社会で将来詩の主題となるべきものは、「人間の運命、すなわち、情念や疑念、特異な性格や惨めな不幸を抱えつつ、国家や時代から疎外され、自然や神の前に立つ人間」であった。

エイハブやビエール、あるいはコスモポリタンやクラレルを念頭に置くならば、トクヴィルのこの見方は、メルヴィルの場合見事に適中したと言えるだろう。なるほどこれらの人物は、生に対する姿勢という点で、必ずしも一括りにすることはできない。人を煙に巻くコスモポリタンや、受身の姿勢に徹するクラレルに、「打ち抜くなら仮面を打ち抜け」（Ⅵ、一六四）と豪語するエイハブや、「黙示録よりも深い神秘を世間の人に明かしてやる」（Ⅶ、二七三）と叫ぶビエールの激しさは、少しも認められないのである。実際クラレルの場合、ここで作者メルヴィルは宗教的回心を遂げ、従来の過激なプロテスタンティズムを放棄する⁽¹³⁾、という見方も出されるほどである。

しかしこれら四人の人物像は、トクヴィルのな意味においては、共軛されることもまた確かである。エイハブやビエールが「情念」の人であるとするならば、「愛」や「信頼」というキリスト教的言葉や梃子にひたすら人を欺きつつけるコスモポリタンや、キリスト教を激しく懐疑する神学徒クラレルは、さしずめ「疑念」の人と言えるであろうし、一般社会から遊離しているという意味においては、これら四人が「疎外」された存在であることも確かである。そしてこれらの人物が、いずれも「自然や神の前に立つ人間」であ

ることに關しても、おそらく異論の介在する余地はないのではあるまいか。とするとメルヴィルの場合、アメリカ像に限らず、人物像においても、またそこに連続性が認められるということにもなるだろう。

このような連続性は、『クラレル』以後もおそらく作動する。遺作『ビリー・パッド』（一八九一）も、その例外ではない。無実の罪で帆船に吊られる無垢の若者ビリーは、「墮落以前の若いアダム」（九四⁽¹⁴⁾）とされる点で、確かにあのアメリカン・アダムの典型である。しかしこの人物は、見たところ闇よりも、むしろ光に包まれている。エイハブやビエールに垣間見られた、あのブラガドッチオへの危険な兆候は、少しも見当らないし、死刑の判決に従順に服するその姿は、父アブラハムにより神に捧げられるイサクとしての姿そのものである。そして、朝日を受けて吊られゆくその姿には、贖罪のキリストの栄光の姿さえ重なる。

しかし忘れてならないのは、このビリーが、「カインの町ができる以前の世界から例外的に引き移された」（五三）存在であったことである。だとすると、ビリーの住むべき本来の世界は、「カインの町ができる以前の世界」ということになるが、このような原初的世界は、つまりは『クラレル』でロルフが思い描いたあのタヒチ島と、等価なものとなるだろう。おそらくは幻想の地でしかないものであり、とすれば、アメリカン・アダムとしてのビリーに注ぐ一条の朝の光も、幻想により、それだけ稀薄化されたもの、と言わねばならないのではあるまいか。

晩年の詩集『ティモレオン』（一八九一）の中的一篇「アントニウスの時代」は、このようなメルヴィル的世界を何がか反映するものだろう。ギボンの『ローマ帝国盛衰記』に触発されて書かれたというこの詩の末尾で、「復元されたアントニウスの時代に／あ、あ、アメリカの姿が重ならんことを」（二七四⁽¹⁵⁾）と記すメルヴィルは、その冒頭で、今はなき異教の世界に想いを寄せ、次のように記して

